



天 文 新 知 識

火 星 世 界 の 氣 象

ロシアのオデサ市にゐるシモノフ Gleb V. Simonov 氏が、地球以外の星に生物が住み得るか否かを検討するため、先づ、火星の氣象を、今まで諸所の天文臺で行はれた觀測結果の綜合研究により、知り得た所によると、

(1) 火星表面に大氣が存在することは、疑ひ無い確かな所であるが、其の氣壓は略々60ミリメートルで、即ち、地球海面の約13分の一である。

(2) 大氣の成分は地球の空氣の成分と凡そ同じである。酸素の絶對量は地球の空氣中の約15パーセントであるが、他のガスとの比例から言へば、地球の空氣中の比例よりも多いこととなる。

(3) 水蒸氣の分量は、普通、地球の大氣中にある分量の5乃至6パーセントである。

(4) 温度は

平均溫度	— 16° C
赤道(晝間)	+ 5
同 (朝)	— 45
同 (暗部)	+10° 乃至 +20°
兩極部(夏)	+ 18
同 (冬)	— 70

尙ほ、地球表面と同様に、風や雲や、霧、霜等があるが、雨は無いらしい、從つて、大きい池や湖水等は有るか無いか、疑はしい。植物はあるらしく、又、氣候の變化による生滅もやつてゐるらしいが、春になつて、高緯度の植物が最初に生長するのは、恐らく濕氣の都合によるらしく、之れは地球の世界の事情と著しく違ふ。

之れにより、火星世界の氣象は可なり寒いらしく、從つて高等生物は棲息が非常に困難である。しかし全く不可能ではない。氣壓60ミリと言へば、地球では地上18キロの上空の氣壓に相當するのだから、人類などはとても生存できない。しかし下等なものは生きられるだらう。〔P. A. (1932 March) 161〕

1931年に記念せられし人々

ブレデキン Bredichin (1831年生) ロシアの天文學者、特に彗星の尾の研究をやり、有名な人

カベンデシ Cavendish (1731年生、1810死) 英國の物理學者。振り秤によつて地球の平均比重を測定した人。

ファロ Fallow (1831年死) 英領南アフリカのケープ天文臺の創立者、初代の臺長。

マクスエル James Clerk Maxwell (1831年6月13日生、1879年11月5日死) 英國の數理

學者、土星の輪は微塵星の集團なることを立證した人。

ボン J. L. Pons (1761生, 1831年死) 佛國マルセイユの天文家。一生涯中に37個の彗星を發見す。

ストーン E. J. Stone (1831年生) 第一代の南阿ケ1天文臺長。

ブリグス H. Briggs (1556年生, 1631年死) 對數の改良家。

ブルカロス太陽熱觀測所は廢止

米國スミソン學院が第三太陽熱觀測所として1927年以來南西アフリカのブルカロス山 Mr. Brukkaros 上に開設してゐた所は、過去五ヶ年の成績により、今回廢止され、他に好適地を求めることになつた。ブルカロス山の缺點は空に霞の多いこと、風の強いことであつた。新しい候補地の一つは西アラビヤのシナイ山脈中のセント・カタリン St. Catherine 山で高さは8600尺、殆んど雨天無く、風も極めて弱いといふ。

空氣の成分と氣象

南阿のインネス R. T. A. Innes 博士が言ふ所によれば、地球世界に於いて現今かなり溫暖な地方に昔時氷河が存在した事實は、漸次に氣象上の變化があつた事を物語るわけであるが、其の理由として、太陽熱が變化すると考へるのは誤りである。太陽熱の増減は同時に雲量の増減を伴ひ、結局、寒暑の變動を著しく緩和するからである。其れよりも、むしろ、長い年間に於いて地球と彗星の如きものが近接衝突して酸化炭素その他のガス成分が空氣中で著しく變化する事で氷河時代の説明が出来るのではないかと言ふ。事實、米國のハンフリス W. J. Humphreys 氏等の研究によると、空氣中に於ける酸化炭素の量は一般植物に大影響を與へ、從つて其れが又動物の食糧にも影響するわけである。又、高層空氣中に近年著しく重要視せられるオゾンも見逃すことは出来ない。オゾンが多ければ日光の紫外線を多く吸収して生物の生命に危害を與へ、又、オゾンが少なければ、紫外線を盛んに地上へ達せしめるから吾人の眼を害することとなる。[Scientia 1932 Jan.]

川崎俊一氏の渡歐

岩手縣水澤の緯度觀測所首席技師理學士川崎俊一氏(本會々員)は去る4月8日神戸出帆の靖國丸で渡歐の途についた。氏は約二ヶ年外國に滯留する筈であるが、主として英國ロンドン市に居て、ジェフリス博士やグリニチ天文臺と密接に關係して研究される由。

フェリエ將軍逝去す

フランス國の無線通信學界の最大權威であるフェリエ Gustave Ferrié 將軍は去る2月16日、パリの自宅で逝去された。享年63歳。將軍はかのマルコニ博士等と共に十九世紀末以來の無線電信界に活躍した先覺者であつて、エフェル塔に發信所を設けて、其の所長となり、又フランス國の陸軍無線部長を兼ね、社會上にも學術上にも甚だ重要な地位にあつた。各種の國際會議にも度々出席して、世界の學會に多くの知人を有つてゐた。去る1926年末に世界の各天文臺を通じて行はれた無線報時により經度觀測には將軍の盡力は非常なるものであつた。後任にはペリエ Pelier 將軍が推される由。